

信号が変わり、『マナ』はスタスタと道を渡り始めた。渡りきった所で、『のら』の『いち』と言って、『マナ』は足元を見たが、そこに、『のら』の姿はなかった。『マナ』が道路の向こう側に目を向けると、そこには動けずに棒立ちの、『のら』の姿があった。信号の歩行者マークが点滅を始めた。『マナ』は大声で、『のら』を呼んだ。その声で、『のら』は正気に戻った。『のら』早く渡れ。』のら』は慌てて渡り始めた。しかし道路の真ん中で、すでに信号は赤に変わっていた。次の瞬間、車のクラクションが鳴り、『のら』に向かって車が突っ込んできた。『マナ』は「あ」と思い目を瞑った。次の瞬間、足元に何かが当たる衝撃を感じた。『マナ』が目を開けると、そこには息を切らし、口に風呂敷をくわえた『のら』の姿があった。『のら』大丈夫か。どうして助かったんだ。しかし、『のら』はよく覚えていないのか、息を切らし「ハアハア」と言っばかりであった。『マナ』は『のら』が遅れないようにと、『のら』の手を取った。するとマルツとした感触が、『マナ』の手に伝わってきた。不思議に思い手を見ると、『のら』の手から少し血がにじんでいた。

ラーメン屋さんに着くと、いかつい店長と、ちよろちよると動きの早い店員が二人を迎えた。「へい、いらっしゃ」。いかつい店長が大声で叫んだ。続いて「何にします」と店員がビクビクしながら近づいて来た。『マナ』は「ラーメン二つ」と答えた。「へい、ラーメン二丁」と店員が言うと、『チュウ太』、元気がない」と店長が怒鳴りつけた。「すみません」と店員はペコペコと謝っている。『マナ』は相変わらずだなと思った。「あの熊怖い。さっきの車より怖い」と、『のら』はポツリと言った。

